

女子会

密会

春日信彦

嫉妬病

安田は、最近の体調不良を大学の仲間に相談できず落ち込んでいたが、このままでは衰弱死するような不安にさいなまれ、思い余って鳥羽に相談することにした。”死にそうだ”という地獄から送られたような安田からのメールを見た鳥羽は、交通事故にでもあって死にかけているのではないかと思い、原チャリ”スズキアドレス”にまたがりアクセルをふかした。ジェットヘルメットを左わきに抱え息を整えた鳥羽は、玄関のチャイムを三度鳴らした。だが、誰も出てこなかった。留守と思ったが、念のためノブに手をやるとノブは回転した。

ドアのすき間から頭を突っ込み「コンチワ～、センパ～～イ、トバデ～～ス」と大声で挨拶したが、返事の声は帰ってこなかった。もしかしたら、病院からのメールではなかったかと思ったとき、二階から誰かが下りてくるパタンパタンというスリッパの足音が聞こえてきた。いるのなら返事ぐらいすればいいのにといい、ちょっとむかついたが、姿が現れるまで玄関でじっと待った。間の抜けた足音を聞いていると青白く精彩のない落ちくぼんだ眼の顔が幽霊のごとく現れた。

安田は今にも息が途絶えそうな声で返事した。「ヨ～～、鳥羽か。上がれ」あまりにも変わり果てた安田の姿を見た鳥羽は、もしかしてガンにでもなったのではないかと思い、静かに安田の後について歩いた。キッチンテーブルの椅子に腰かけ安田のやせ細った姿を見つめながら、どのように慰めればいいのか考えた。魂が抜き取られたように精気を失った安田は、ゆっくりとフレッズのドアを開きパックの野菜ジュースを取り出した。「おい」と鳥羽に振り向き声をかけた。

とっさに反応した鳥羽は、即座に立ち上がりフレッズにかけていった。安田は、食洗器から二つのグラスを取り出し病人のような足取りでテーブルについた。ぼんやりとしたまなざしで鳥羽を見つめ、二つのグラスを鳥羽の前に押し出した。鳥羽はパックの野菜ジュースをコップ半分ほど注ぎ、「元気、ナイスね」と言って安田に差し出した。安田は、グラスの野菜ジュースをしばらくじっと見つめグラスを手にとろうとしなかった。見かねた鳥羽は、安否を気遣った。

「先輩、いったいどうしたんですか？かなりやせたんじゃないですか？病気ですか？」大きくため息をついた安田は、この世の終わりといわんばかりの悲壮な顔で返事した。「死神に取りつかれた。もう、俺の人生は終わりだ」言い終えた安田は、ゆっくりとグラスを手に取り口に運んだ。おそらくガンだと察知した鳥羽は、病気のことにも触れるべきか悩んだが、事実を知ってあげることは親友の役目だと決心した。「ガンですか？」慰めの言葉を探したが、これ以上の言葉が出てこなかった。

安田はしばらく沈黙を保っていたが、小さな声で返事した。「いや、違う。生き地獄ってやつだ。いっそ、ガンで死んだほうがまだ」ガンよりも深刻な病気を考えてみたが、とっさには思いつかなかった。一瞬、筋ジストロフィー症ではないかと思ったが、言葉にはしなかった。「かなりやせましたね。栄養が足りなんじゃ？栄養バランスが悪くなれば、体調がおかしくなりますよ。あ、そうか、それで、野菜ジュースを」一瞬、安田の表情にニッコっと小さな笑顔が現れたが、即座に表情は凍りつき、コクンと首が前に折れた。

打ち明ける決意がついたのか顔を持ち上げた安田は、恥ずかしそうな表情を浮かべると唇をほんの少し動かした。もしや、エイズではないかと思った鳥羽は、言葉を遮った。「わかりました。でも、今は、よく効く治療薬があります。でも、かなり高いですが」安田は、どんな病気と勘違いしたのだろうかと目を丸くして鳥羽の顔を覗き見た。「おい、俺が思うに、今のところ、特効薬はないと思うが」鳥羽は、これ以上病気の話をしたくなかったが、エイズでもちゃんと生活している人は多いことを教えることにした。

「先輩、どのような方と関係を持たれたかは、聞きません。魔が差すということもあります。薬もありますし、気を落とすことはありません。たとえ、先輩がエイズでも、僕は、一生親友です。先輩の苦しみは僕の苦しみです。一緒に、病気と闘いましょう」鳥羽の心配もやせ細った今の姿を見れば無理もないと思ったが、それにしてもエイズと間違えられるとは、かなり、見くびられたものだとがっかりした。少しむかついた安田は、語気を強め返事した。「おい、エイズだと。俺は、エイズなんかと違う。あいつのは、一切薬が効かない、不治の病だ」

鳥羽は、あいつと聞いて首をかしげた。「先輩、あいつって、誰ですか？先輩が病気だと思っていました」肩を落とした安田は、人生相談をするように話し始めた。「俺の病は、あいつのせいなんだ。あいつとは、リノだ。どうして、俺がこんな目にあわされなければ、ならないんだ。あ～～」リノと聞いた鳥羽は、何が何だか分からなくなってしまった。婚約者のリノさんに何か起きたのだろうかと思い質問した。「いったい、何があったんですか。リノさんが、どうしたっていうんですか？まさか、リノさんが、ガン？」

安田は、頭を抱えうつむいていた。鳥羽は慰めるように声をかけた。「心配のあまり、食事ものどに通らないって、ことですね。入院されてあるんですか？今から、お見舞いに行きましょう」頭を抱えた安田は、鳥羽の早とちりにはどうしようもないといわんばかりの顔つきで話し始めた。「おい、リノの病気は、ガンどころじゃない。不治の病だ。あれは、何という病気か知らんが、リノはますます元気になって、俺が衰弱していく病気だ。あ～～、誰か助けてくれ」安田の悩みは、何が何だかさっぱりわからなかった。

「先輩、いったいどうしたっていうんですか？元気になる病気って聞いたことはありません。要は、先輩が浮気して、ヒステリーを起こしたリノさんに叱られているってことですよ。女性のヒステリーってのは、周期的に起きる生理現象であって、病気ではありません。恋人同士には、よくあることです。先輩が、意地を張らずに土下座して謝れば済むことです。先輩は頑固だからな～～」安田は、叫んだ。「俺は浮気なんかしていない。リノが勝手に思い込んでいるだけだ。

男というものは、自分の罪を認めたがらないものだとわかっていたが、素直に謝るのが最善の解決法だと思った。「先輩、本当は、浮気したんですよ。そりゃ～～、リノさん、怒りますよ。婚約した限りは、浮気は厳禁です。僕も、許しません。先輩が悪い。反省すべきです」顔を激しく振った安田は、つぶやいた。「俺は、悪くない。浮気もしていない。どうして、疑われるんだ。そのうえ、拷問まで」拷問と聞こえたと思い問い返した。「拷問？いったい、拷問って、何ですか？リノさんは、暴力をふるうんですか？まさか？」

顔を左右にゆっくり振った安田は、告白するようにつぶやいた。「いや、暴力以上の拷問だ。俺の精気をすべて抜き取る拷問だ。近々、俺は、きっと死ぬ」暴力以上の拷問と聞かされても具体的なことがさっぱりわからなかった。「いったい、どういうことですか？僕には、さっぱりわかりません。もっと、わかりやすく話してください。僕は、親友じゃないですか。はっきりと、悩みを打ち明けてください。必ず、力になりますから」鳥羽は、にらみつけるように顔を覗き込んだ。

安田は、相談してもどうすることもできないと思ったが、実情を話し始めた。「リノは、セックスに狂ってしまった。俺の浮気が心配なのか、毎日、セックスさせられる。もはや、拷問の何物でもない。鳥羽が、医者のお卵でも、こればかりは、どうすることもできないだろう。結婚するまでに、きっと、俺は死ぬ」鳥羽も話を聞いて、顔が引きつってしまった。確かに、嫉妬のあまりセックスを要求される事例を聞いたことがあったが、事例が目の前に現れるとどう対応していいかわからなかった。

鳥羽は、いくつかの事例を考えてみた。確かに、セックス依存症というのはある。失恋のショックのあまり、恋愛恐怖症に陥り、不特定多数とセックスする場合。また、夫の浮気に対する不安から、過度にセックスを強要する場合。先輩の事例は、後者にあたる。だが、セックスに関しては、特効薬があるわけではない。男女間の関係を円滑にするには、信頼関係を築く以外にない。リノさんに信用されて、決して、浮気しないと思ってもらう以外にない。問題は、どうやって、信用してもらうかだ。

「先輩、何度か浮気したんじゃないんですか？きっとそれが原因で、信用を失ったんですよ。二度と浮気いたしませんと土下座されてはどうですか」安田は、目をむいて反論した。「バカ言うな。俺が一体いつ浮気したというんだ。俺は、浮気なんか一度だってしていない。神に誓ってもいい。リノはな、勘違いしているんだ。俺は、執行幹部の女子と話し合う場合がよくある。でもそれは、学生運動には不可欠なんだ。決して、浮気なんかじゃない。それがわからないんだ。困ったもんだ」

腕組みをした鳥羽は、う～～となり返事した。「でもですね～～、それは、先輩の一方的な意見ですよ。リノさんからしてみれば、やっぱり、浮気なんじゃないですか」安田は興奮したのか大きな声で反論した。「鳥羽までリノの肩を持つのか。だからだな～～さっきから浮気じゃないといってるじゃないか。単なる、話し合いなんだ。話し合いが、浮気なのか？それじゃ、俺に、女子とは一切話をするなというのか？」鳥羽はうなずいた。「その通り。女子とは話してはいけません。女子と話していれば、きっと、その女子を好きになるに決まっています」

呆れた顔でテーブルを両手でバンとたたいた。「おい、いつからお前は、リノの親衛隊になったんだ。女子と一切話さずに、どうやってリーダーをやれっていうんだ。俺に、リーダーをやめろっていうのか。学生運動をやめろっていうのか？九学連会長をやめろっていうのか？そう簡単にやめられるものじゃないんだ。もうちょっと、考えてものを言え。ばかばかしい。話にならん」話がかみ合わなくなり、鳥羽は気落ちしてしまった。だが、安田のために、性格の不一致から悲劇にならないように意見を述べることにした。

「先輩、学生運動とリノさんとは、どっちが大切なんですか？リノさんじゃないんですか？大学を卒業したら、結婚すると約束されたんでしょ。ならば、リノさんの気持ちを第一にすべきでしょ。僕は、会長もやめ、学生運動もやめるべきだと思います」安田は、鳥羽に相談したことは、とんでもない大間違いだと後悔した。まさか、リノに肩入れするとは、夢にも思わなかった。「おい、鳥羽まで、頭が変になったのか。俺は、浮気もしてないし、婚約を破棄するなんてことも、一切言っていない。それなのに、どうして、学生運動をやめなきゃならんのだ」

あまりにも興奮した安田に戸惑ってしまった。ちょっと言い過ぎたような気がして反省した。まずは、安田の潔白をまず認め、それから、将来のことを話すことにした。「わかっています。先輩は、浮気してないし、全く悪くないんです。でも、先輩の将来のことを考えてみてください。先輩は、将来、旅館の経営者になられる方です。だから、経営学を学ぶために、F大学に入学されたんですね。決して、学生運動をするためではないはずです。そうじゃないですか？」

将来を鳥羽に語られたとたん、自分の将来が嫌になってしまった。決して、旅館の経営が嫌じゃなかったが、他人に自分の将来が拘束されているようで不愉快だった。「まあ、鳥羽が言っていることは、間違いない。だから、今は、旅館に住み込みで、バイトをしている。少しでも、旅館の仕事を覚えて、リノの役に立ちたいと思っている。でも、俺は、学生だ。結婚もしていない。学生のうちは、自由でいたい。学生運動は、俺の青春なんだ。それが悪いとでもいうのか？」

よくよく考えてみると安田が哀れに思えてきた。婚約をしたために学生生活まで拘束されている。でも、もはや後には引けないはずだ。学生だからといってもリノさんとの将来を優先すべきではなかろうか。安田には、決意を要することだと思ったが、二人の将来のために名案を提案することにした。「先輩のリノさんへの思いはよくわかりました。そこで、提案ですが、この際、旅館業に専念されてはどうですか？」安田には、鳥羽の提案の意味がよく分からなかった。

「専念するとは、どういうことだ。俺は、将来のために、住み込みまでして、丁稚奉公のようなバイトまでしている。部活もせず、授業がないときは、ただ働きのようなバイトをやっている。俺は、精一杯、リノのために協力してると思うんだが。これ以上、どうしろというんだ」鳥羽は、少しためらったが、二人の将来のためにズバリ提言することにした。「先輩は、男の中の男です。僕は、尊敬しています。だからこそ、言わせてください」

鳥羽は、一呼吸おいて、大きく深呼吸した。じっと安田の顔を見つめると話し始めた。「先輩、学校をやめて、今すぐ、結婚すべきです。これが、二人の未来のためです」鳥羽は、真剣なまなざしで安田を見据えた。安田は、信じられない提言に何も言葉が出てこなかった。あと二年すれば、卒業する。安田は、大学だけは、卒業したかった。それは、親も望んでいることだった。「鳥羽、ちょっと、待て。どういうつもりか知らないが、中退だと。バカな。結婚も卒業してからだ。そのことは、リノも承知している」

やはり、安田には事の重大さが理解できていないと思えた。リノさんが、最も望んでいることは、一刻も早く結婚して、旅館を一緒に切り盛りしてくれること。また、大学なんかは、リノさんにとってはどうでもいいこと。そのことが、安田には理解できていないと思えた。「確かに、先輩にとっては、大学卒業も学生運動も、大切なことでしょう。でも、リノさんの身にもなってみてはどうでしょう。リノさんにとっては、先輩だけが、唯一の頼れる人なんじゃないでしょうか。僕は、リノさんのために、一刻も早く、結婚すべきだと思います」

安田は、鳥羽に相談したことをつくづく後悔した。セックス拷問の解決方法は、中退して、結婚ということに行きついた。鳥羽の意見は、リノの気持ちを考えただけの意見でしかなかった。そもそも、鳥羽は非現実的な恋愛観を持っている。こんな男に一般学生の気持ちを考慮した意見が出せるはずがなかった。鳥羽は、今でも、ゆう子姫に一生お仕えするといっているような男だった。これ以上、鳥羽に相談しても、今以上のいい解決方法は出てこないと判断したが、親友としての意見を述べてくれたことに感謝して、一応は鳥羽の無謀な意見を尊重することにした。

「鳥羽の気持ちは、よくわかった。とにかく、信用を取り戻す努力をする。リノは、とにかく、疑い深い。もう一度、結婚時期について、リノと話し合ってみる。それでも、リノが納得いかなければ、その時、鳥羽の意見を考える。いい親友をもって、俺は、幸せだ」鳥羽は、自分の意見を受け入れてくれたと思い、有頂天になった。「やっぱ、先輩です。僕も、一生、ゆう子姫にお仕えする身です。お互い、お仕えいたしましょう」能天気な鳥羽と一緒にされて面食らったが、うなづくことにした。

「まあ、お互い、いい女性に巡り合えたということで、幸運だったな」鳥羽は、ますます、安田が好きになった。「あ、そうです。お二人の話し合いには、僕も参加いたしましょう。先輩が言いにくいことがあれば、僕が代弁します。いつ、話し合われますか？」これ以上鳥羽にまどわりつかれては、ややこしくなるようで、話を替えることにした。「まあ、その時は、知らせる。それより、今でも、ゆう子を追いかけているのか。いい加減にあきらめたほうがいいんじゃないか？」

「先輩、何度も言っているじゃないですか。僕は、ゆう子姫を追いかけているんじゃないんです。ストーカーじゃないんです。お仕えする下僕なんです。ゆう子姫のために一生ご奉仕申し上げます。先輩のようなよこしまな愛じゃないんです。これぞ、純愛というやつです。先輩には、わからないでしょうが」やはり病気は治っていないと思い、いつものようにお説教するのはやめた。「好きにやってくれ。俺は、凡人だし。よこしまな愛しかないからな」

鳥羽は、なんだか気分がハイになり、一刻も早く二人を結婚させたくなっていた。「先輩、明日にでも、話し合われたらいかがですか？学生結婚というのは、結構よく聞きますよ。披露宴で、先輩を絶賛した世界一の親友スピーチをしますよ。そう、来月のジューンブライトがいいんじゃないですか」これ以上、下僕病が進行したら、新婚旅行までついてくると言い出すような気がした。「おい、待て待て、そう、焦るなよ。鳥羽の気持ちは、十分わかった。とにかく、明日はダメだ」

ダメだと言われると理由を聞きらなくなってしまった。「明日はダメって、どういうことですか？明後日ならいいんですか？」安田は、事情を話すことにした。「詳しいことはわからんが、明日の土曜日に女子会をするらしい。それで、俺は追い出されたんだ。俺は、邪魔ということだな。ということで、機会を見て、学生結婚のことは話してみるさ。学生結婚というのも、いいかも」

名案

女子会と聞いて鳥羽の瞳がキラキラと輝いた。「女子会ですか。それならそれと、教えてくれればよかったのに。女子会っていうことは、ゆう子姫も参加するんでしょ？ゆう子姫には、1年以上も会っていないんです。僕も女子会に参加します。場所はどこですか？」鳥羽の頭は、正真正銘の能天気だと思った。「おい、女子会ってのは、男子禁制なんだ。そんなこともわからんのか。お前は、バカか」安田こそ全くわかっていないと思い、鳥羽は、血相を変えて反論した。

「バカとは、何ですか。参加するっていうのは、女子会の給仕をやるってことです。ボーイとしてだったら、いいんじゃないんですか。ガールズトークの邪魔はしないんだから」安田には、鳥羽の思考回路が全く分からなくなった。「女子会のボーイをやるっていうが、ブサイクなボーイは結構ですって、奴らが断ればどうなるんだ。鳥羽にうろうろされたら、不愉快に決まっている。きっと、断られるさ」

完璧にへこまされた鳥羽は、さすがに反論ができなかった。万が一、ゆう子姫に拒絶されたら、ショックのあまり気絶するかもしれないと思った。「そうですか。ブサイクは、およびでないですか。でもな～～、お会い申し上げたのです、ゆう子姫に。一目でいいから。願いは、かなわないものでしょうか」今にも泣きだしそうな顔でうつむいてしまった。ちょっと言い過ぎたと思った安田は、覗き見るぐらいはできると励ますことにした。

「まあ、ちょっと言い過ぎた。許せ。女子会は、旅館でやるらしい。ちょっとぐらいだったら、覗けるんじゃないか。風呂上がりの浴衣姿とか」浴衣姿を思い浮かべた鳥羽の頭に妄想が一気に膨らんだ。「日帰りってことはないから、一泊するってことか。ゆう子姫の浴衣姿ですか。夢のような話ですね。湯船に輝くゆう子姫の美肌。ゆう子姫の小さなおみ足をお洗い申し上げたいな～～」あきれ返った安田は、夢心地の鳥羽の顔を見て言った。「まあ～～そういうことだ。鳥羽も、明日、温泉につかったらどうだ。ゆう子と会えるかも」

その気になってしまった鳥羽は、予定を立て始めた。「それでは、明日の午後、3時にチェックイン。部屋は、先輩の汚い住み込み部屋」自分勝手な予定にむかついた安田は、お客として泊まるように営業した。「おい、旅館にやってくるのに、俺の部屋とはどういう了見だ。ちゃんと、お客として部屋をとれよ。こっちは、商売でやってるんだ。親友だからといって、タダで泊めてやるようなお人よしじゃない」

安田の商売人口調に鳥羽は、目を丸くした。「もう、若旦那ってわけですか。そいじゃ、一番安い部屋にしてください。料理も最低でいいです。今、金ないんすよ。安部教授の助手をやってるんですけど、もらえるのはスズメの涙なんです。しかも、医学部ってのは、バイトの時間がないくらい、大変なんです」安田は、鳥羽もバイトに明け暮れている学生と同じように考えていた。金欠病と聞いて、気の毒になった。「そうか、鳥羽は、医学部だったよな。バイトは、御法度か。まあ、今回だけは、大目に見てやるか。俺の部屋に泊まれ」

ガッツポーズをとった鳥羽は、笑顔で感謝の言葉を述べた。「さすが、若旦那。太っ腹でいらっしやる。ところで、女子会にどんなメンバーが集まるんでしょうかね。ワクワクしますね」リノがうかつにも口にしたらちょっと気になるメンバーを話すことにした。「ちょっと気になるメンバーがいるんだ。なんと校長が来るらしい」鳥羽は、校長といわれてもピンとこなかった。「校長って、高校のですか？」

安田は、顔を左右に振ると腕組みをして首をかしげた。「それがだな～～。かの有名な篠田校長だ」鳥羽は、糸島中学の卒業生でなかったため篠田校長を知らなかった。「篠田校長って、どこの高校ですか？」鳥羽は姫島中学校卒業であったことを思い出し、篠田校長のことを説明することにした。「鳥羽は、姫島中だったな。篠田校長は、糸島中学校の校長だ。美人で天才。エリート教育で超有名校に合格させた実績ある。陰では、鬼校長と呼ばれているがな」

美人で天才と聞いて校長に興味がわいてきた。「その美人校長がやってくるんですね。ますますワクワクしますね。でも、女子会に校長ってのは、奇妙ですね。校長が招集したんでしょうか？」安田もなんとなく奇妙に感じていた。自分を追い出したのも何か聞かれないことがあるからではないかと勘繰った。「俺も、ちょっと引かかるんだ。極秘の会合だったら、盗み聞きしてみたいくなるのが心情ってもんだよな。この稼ぎ時に俺を休ませるとは、がめついりノにしては、ちょっと変だ」

鳥羽も今回の女子会の実体に興味がわいてきた。校長は、いったいどんな話をするのだろうかと考え始めると盗み聞きしたくなった。「先輩、今回の女子会は、きっと何かありますよ。先輩を追い出し、校長がやってくる。絶対、何かあります。クンクンにおいます。どうにかして、盗聴できませんかね〜」安田も盗聴したくなった。だが、どこの部屋で女子会するかはわからない。盗聴するいい方法はないか考え始めた。

「確かに、聞いてみたいよな。校長とゆう子は間違いなくやってくるはずだ。でも、盗聴するって言っても、どの部屋かわからないからな〜。何かいい方法は、ないものか」鳥羽も盗聴方法を考え始めた。ニャ〜ニャ〜という猫の鳴き声が、静かな沈黙に割り込んできた。ポンと手を打った鳥羽は、ニコッと笑顔を作り安田を見つめた。名案が思い付いたと察した安田もニコッと笑顔を送り返した。

鳥羽は身を乗り出して話し始めた。「どの部屋で密会しても盗聴できる方法が見つかりましたよ、先輩。きつとうまくいきます。マリリンにお願いするのです。リノさんのマリリンに」マリリンとはリノが飼っている愛猫の三毛猫だった。安田には、意味がさっぱり分からなかった。「ネコに盗聴してもらっていいのか？ネコには、日本語はわかるまい。夏目漱石のネコじゃないんだから。俺は、マジに考えてるんだ。天才鳥羽の頭も大したことはないな〜」

鳥羽は、名案の説明をすることにした。「先輩、確かに盗聴をマリリンに頼むんですが、マリリンに話を聞いてもらうんじゃないんです。マリリンに盗聴器をつけるのです。マリリンだったら、女子会の部屋で寝ころんでいても怪しまれなくてもすむでしょ」確かに名案だと思ったが、高性能の盗聴器などというアイテムは、007の話であって、そんなものがないことは明白だった。「まあ、名案かもしれないが、盗聴器を持っているのか？俺は、そんなもの持ってないぞ」

鳥羽も盗聴器は持っていなかった。でも、超小型のボイスレコーダーを持っていた。それは、授業を録音するために使っていた。「僕も盗聴器は持っていません。でも、超小型の高性能ボイスレコーダーを持っているんです。1回の充電で5時間録音できます。これだけ録音できれば、十分じゃないですか。明日、早速、マリリンの首輪に取り付けましょう」

安田は、大きくうなずいた。「ボイスレコーダーか。それはいい。マリリンは、リノのそばに行きたがる。かなり期待できそうだな。密談は、みんなが寝静まった時間帯だろう。ということは、12時前後の真夜中」鳥羽も同じようなことを考えていた。「離れに部屋をとったのも誰にも聞かれたくないからでしょう。僕も、密談は真夜中だと思います。ところで、ネコは真夜中でも活動してくれますかね～～」

安田は、しかめっ面になって首をかしげた。いつもエサをやっているのは、リノだった。しかも、マリリンは、夜の8時にはリノのベッドで寝ていた。「そうだよな。ネコは、真夜中には活動しない。きっと寝ているに違いない。困ったな～～。マリリンを起こすいい方法はないものか」鳥羽も真夜中にネコは活動しないと思えた。どうやってマリリンを起こして、リノのそばに行かせるかが難問のように思えた。

女子会

5月5日（土）子供の日、若女将リノは、連日、てんてこまいでくたくたになっていたが、うれしい悲鳴を上げていた。縁結びの温泉として、さしはら温泉旅館は、国際的に有名になっていた。ゴールデンウィークを利用した国内の観光客はもとより、海外からも多くの観光客が九州を訪れ、糸島の温泉街もにぎわっていた。佐賀の有田陶器市には約120万人、福岡のドンタクには、約200万人の観光客が押し寄せていた。

校長の指示を受けていたリノは、女子会のために最高級の離れの家族部屋を確保していた。招集されたメンバーは、ゆう子、リノ、横山、北原、峰岸、小島の6名だった。集合時間は、午後5時と指定されていた。リノは、4時30分になると仲間を迎えるために南別館の玄関に向かった。4時45分、玄関前に到着したのは、横山、北原、峰岸、ゆう子を乗せたタクシーだった。彼らは、ゆう子の家に集合し、4人乗り合わせてジャンボタクシーでやってきた。4時50分、校長は、愛車のポルシェボクスターに秘書の小島を乗せてやってきた。

彼らは南別館から通じる離れの一戸建（2L）高級家族部屋に案内された。このような部屋は、現在5つあり、人気があるのか3か月前にはすべて予約が完了された。利用するお客は、老夫婦、謎めいたカップル、代議士、会社役員などの常連客だった。ただし、一泊二日、一人5万円、（3歳以下は一人2万円）と割高となっていた。ゴールデンウィークには、すでに4部屋が予約がなされ、残り一部屋は常連客の老夫婦ために確保されていた。そのため、校長には、リーズナブルな部屋を勧めたが、校長は、必ず一戸建の部屋をとるように指示してきた。

困り果てていたリノだったが、偶然にも一件のキャンセルがあり、一戸建の離れの部屋を確保できた。別荘のような高級な部屋に案内されたゆう子たちは目を丸くしていた。校長は、ここであれば、だれからも盗聴されることはないと安心していった。リビングに集まった6人に早速指示を出した。「夕食は7時から。会議は、そのあとで。それまでは、自由にくつろいで。今回は、すべて、私のおごりだから、好きなだけ、食べて飲んで歌っていいわよ。デザートはメロンもマンゴーもスイーツも食べ放題よ。今日は、おもいっきし、どんちゃん騒ぎしましょう。リノには、迷惑かけたわね」

女子会の盗聴をもくろんだ安田と鳥羽は、午後3時過ぎに旅館にやってきた。リノには鳥羽が手伝ってくれるから戻ってきたと言って、二人は早速掃除と皿洗いを始めた。猫の手も借りたい状態だったため、ただ働きしてくれる鳥羽の手伝いを歓迎した。ひと段落ついて、午後6時を過ぎると二人は、マリリンを参加させて安田の住み込み部屋で作戦会議を始めた。二人はマリリンと仲良くなろうと懸命にかわいがっていた。安田は、ネコエサのチュ〜チュ〜を食べさせ、頭をなでなでしては、ハグした。

鳥羽は、眠たそうなマリリンを見てつぶやいた。「先輩、マリリン、うまくやってくれますかね〜。リノさんについて回ってくれますかね〜。寝込んでしまって、起きないってことはないでしょうか？」安田は、マリリンがもし寝込んでしまったら、チュ〜チュ〜を嗅がせて目を覚まさせようと考えていた。「そうだ、早速、マリリンにボイスレコーダーを取り付けようじゃないか」鳥羽は、どや顔で返事した。「準備OKです。先輩、見てください」鳥羽は、右掌に載せた2センチほどの超小型ボイスレコーダーを安田の目の前に突き出した。

安田は、身を乗り出して見つめた。「へ〜、こんな小さくても録音できるのか？スゲ〜のがあるんだな」鳥羽は、説明を付け加えた。「1回の録音時間は、5時間です」さらに、胡坐（あぐら）の上で寝ているマリリンに声をかけた。「マリリン、首輪を外すからね」首輪を外した鳥羽は、両面テープで首輪の裏にボイスレコーダーを張り付けた。そして、眠たそうなマリリンの首にそっと首輪を取り付けた。マリリンを持ち上げた鳥羽は、声をかけた。「先輩、ほら、見てください」安田は、マリリンのピンクの首輪に目をやった。「ほ〜、パッと見た目には、誰も気づきそうにないな」

鳥羽は、録音開始の時間を確認した。「録音時間は、5時間ありますから、7時にスイッチ入れますか？」安田は、彼女たちの行動をしばらく考えていた。7時から会食して、2時間ほど歌って踊ってバカ騒ぎ。「録音時間は、たっぷりある。密会は、早くても10時から。そいじゃ、9時からオンといこう。最大の問題が一つある」安田は、腕組みをして、う〜とうなった。鳥羽は、身を乗り出して尋ねた。「いったい、どんな問題ですか？」

安田は、両手で両ひざをポンとたたいて返事した。「メンバーの中に、一人でもネコ嫌いがいたら、この作戦はオジャンだってことだ。この作戦は、全員、ネコ好きでなければ成功しない。夕食は、7時からとっていた。それから、2時間ぐらい、飲んで歌ってバカ騒ぎする。それから、マリリンの出番だ」鳥羽は、真剣なまなざしでうなずいていた。「それじゃ、拒絶されないことを祈って、9時ごろになったら、先輩が、マリリンを部屋に運ぶってことですね」

安田は、大きくうなずいた。「そうだ。9時ごろになったら、バカ騒ぎもひと段落つくはずだ。そこで、マリリンがさみしがっているといって、マリリンを部屋に持っていく。みんなが猫好きならば、キャ〜〜カワイ〜〜と言ってマリリンを歓迎するはず。こう、うまく事が運ばばいいのだが」鳥羽にも安田の懸念がよく伝わってきた。「みんなが、ネコ好きであることを祈る以外ないってわけですね。マリリンはカワイ〜からうまくいきますよ」

鳥羽はメンバーのことが気にかかっていた。「先輩、横山さんは、H大学でしょ。校長が、わざわざ、この密会のためにアメリカから呼び寄せたんでしょ？北原と峰岸は、三人より一つ下の後輩でしょ。そう、小島って誰ですかね。変わった、取り合わせですね。いったい、どんな女子会なんですか？校長は、何か目的があって、招集したことは確かだと思いますが」

安田は、さっぱり見当がつかなかったが、単なる親睦を深めるような密会ではないと考えていた。「思うに、校長は、6人に、何かをさせようとしてるように思うんだ。校長にとっては、とても大切なことを。リノから、詳しいことは聞き出せなかったが、宿泊費は、校長が支払うことになっているそうだ。リノも初めてのことで、全く訳わからん、と言っていた」鳥羽は、眠りに入っていたマリリンを抱っこしてご機嫌を取っていた。

左腕のデジタル腕時計を見た安田は、腹ごしらえをすることにした。「7時を回った。俺たちも飯にしよう」安田は、二人分のまかない弁当を作っていた。「おい、豪華な弁当だぞ。まかないといっても、高級料理のあまりだ。ちらしずし、特上握り、ズワイガニ、クルマエビ、アワビ、サザエ、ウニ、糸島豚のとんかつ、佐賀牛のローストビーフ、こんなの食ったことないだろ～～」最近、鳥羽は金欠病で、ごちそうといえばコンビニの幕ノ内弁当ぐらいだった。「マジ、すごいですね。ただ働きどころか、日当1万円もらった気分です」

鳥羽は、特上握りのトロをポンと口に放り込み、ニコッと笑顔を作った。「先輩は、いつもこんな贅沢してるんですか。うらやましいな～。やっぱ、若旦那ですね」安田は、いつもはこのような贅沢はしていなかったが、大量に仕入れるため、時々、高級品を食べることができた。「バカ、これは、お客に食わせるんだ。今日は、鳥羽のために特別だ。リノがいいっていうから。リノにお礼を言うんだな」

校長主催の会食は、リビングで7時に開始された。テーブルには南側に校長、東側にリノとゆう子と小島、西側に横山と北原と峰岸が腰掛けていた。校長は、6人の顔をゆっくり見渡し早速、話好きの校長は挨拶を始めた。「今日は、集まってくれて、ありがとう。久しぶりに、みんなの元気な顔が見られて、安心したわ。お互い、話したいことがあるでしょ。ワイワイ楽しくやりましょう。集まってもらったのは、私から、ちょっとお願いがあったからなの。そのことは、後で話します。それより、今日は、バカ騒ぎしましょう。そう、まずは、乾杯ね」

校長は、右手のカルピスのグラスを高々と持ち上げた。みんなもジュースのグラスを高々と持ち上げた。「みんなの成功と日本の未来にカンパ～～イ」カチ～～ン、カチ～～ンとグラスの音が部屋いっぱいに響き渡り、拍手が起きた。校長は、今後の作戦のため近況の情報を収集をすることにした。「みんな、ガンガン食べてよ。それと、食べる合間でいいから、みんなの近況を知りたいわ。リノは、若女将だから、毎日戦争ね」

リノは女子会をさしはら温泉旅館で開催してくれたことに感謝していた。「はい、でも、自分の仕事に誇りが持てるようになりました。まともに高校も行きませんでした。今は、自分なりにやってけそうです。今回は、女子会を当旅館で開催していただき、ありがとうございます。久しぶりに、みんなとも会えて、本当に、うれしいです」校長は、さらに質問した。「そう、リノさんには、将来結婚する彼氏がいたんだったわね。楽しみね」

リノは、目じりを下げて話し始めた。「それが、それがですね、彼って、浮気しているみたいなんです。思い過ごしかもしれないんですが、男子って、浮気するものではないですか？結婚相手が目の前にいるっていうのに。校長、浮気してるんじゃないですか？」突然の浮気質問に面食らってしまった。ちょっと困り果てた表情の校長は、首をかしげて返事した。「浮気してるかって聞かれても困るわね。確かに男は、よく浮気するけど、リノの彼氏が浮気しているかどうかは、わからないわよ。何か、証拠でもあるの？」

リノは、この際みんなに浮気の相談をすることにした。「あるんです。時々、香水のにおいがするんです。女子とデートしたっていう証拠でしょ、校長」香水だけでデートしたとは、断定できないと判断した。電車に乗っても隣の女性の香水の香りが移ることがある。「ちょっと、それだけじゃ、浮気したとは言えないんじゃない。彼は、女子とたびたび話をするところがあるんじゃないかしら。対面して話をしていても、香水の香りが移ることもあるのよ」

さらに疑い深い表情を作ったリノは、話を続けた。「でも、ハル君って、意外とモテルんです。執行部の女子と打ち合わせをやっているといってるんですが、その女子って、かわいいに決まっています。気になって、しょうがないんです。最近、夜も眠られないくらい、気になります。リノって、嫉妬深いんですか？」校長は、かなりリノは嫉妬深いと思ったが、結婚を約束していれば、嫉妬深くなるのはやむを得ないと思えた。「そうね～、でも、一番大切なことは、信じるんじゃないかしら。信じてあげなさいよ、彼を」

安田が旅館でバイトしているときは、監視できて気分が落ち着いていたが、大学に行っているときは、デートしているんじゃないかと疑心暗鬼になっていた。信じてあげなさい、と校長に言われてみると、自分の嫉妬深さが嫌になってしまった。でも、純白のウエディングドレスを着た自分の姿が頭に思い浮かぶとほんの少し気分が楽になった。「そうですね。リノって、嫉妬深いんですね。わかりました。信じてみます。2年後には、結婚するんだし。もう少しの辛抱」

結婚と聞いた、ゆう子は、ひらめきを口にした。「婚約したんだし、2年後といわず、来月にでも、結婚したらいいじゃない。善は急げって言うでしょ。絶対、すぐに結婚すべきよ。そうすれば、浮気の心配もしなくていいし。最近、結婚してる学生多いんだから」突然結婚といわれても、リノには心の準備がなかった。しかも、自分がしたいと言っても、相手がOKしなければ実現しないことだと思った。

「え、来月、結婚。結婚はしたいけど。まだ、学生よ。あいつ、なんていうか？それは、無理じゃない」校長は、飛躍した話にストップをかけた。「ちょっと、ゆう子、結婚って、そんな簡単なことじゃないの。本人だけじゃなく、家族の同意も必要なのよ。まずは、リノと彼氏で、しっかり話し合うことね。そういう、ゆう子は、どうなの？彼氏は、できたの？過去を引きずっていても、前進しないわよ」

ゆう子は、自分のことになると黙り込んでしまった。リノが、ここぞとばかりブサイクの話 시작했다。「あいつがいるじゃない。校長、知らないんですか。顔はいまいちだけど。え〜と名前は何と言ったっけ、ゆう子。ほら、あいつよ、ウ〜、ブサイクなやつ。ゆう子のストーカーみたいなやつ」ゆう子は、鳥羽のことを言っているとわかっていたが、自分のファンをブサイクといわれるとむかついた。「鳥羽君でしょ。彼は、ストーカーじゃなくて、ちゃんとしたファンの一人よ」

鳥羽と聞いて寅次郎のようなブサイクな四角い顔をはっきりと思いだした。「そう、鳥羽君ね。ハル君の写真部の後輩なのよ。医学部っていうじゃない。将来は、お医者様か。有望株じゃない。ゆう子、一度付き合っただけなのに。男子は、顔じゃないかも。意外と相性があつたりして」鳥羽は、やさしくて嫌いじゃなかったが、やはり、付き合う相手じゃないように思えた。「鳥羽君は、単なるファン。私は、当分彼氏はいららないの。今は、生徒たちに英語を教えるのが楽しくって。校長に感謝してます」

校長は、糸島中学でゆう子に英語の教育実習をさせていた。「ゆう子は、糸中で教育実習してるの。結構、生徒には、人気があるのよ。もう、糸中のアイドルになったみたい。将来は、英語の教師をさせるつもり。ゆう子、頑張るのよ。そして、日本一の糸島中学にしてちょうだい」あまりにもはっぱをかけられたゆう子は、緊張のあまり甲高い声で返事した。「はい、やれるだけのことは、頑張ります。まだ、ひよっこだから、そう、はっぱかけないでください」

校長は、笑顔を作り、北原の近況を聞いた。「北原さんは、医学部だから、毎日、勉強でしょ。将来は、研究者になるの？」北原は、将来のことはまだ考えてなかったが、ニューロンとグリア細胞についての研究をやってみたいと思い始めていた。「まだ、医学のイロハって感じなんです。まだまだ、長い道のりの第一歩を踏み出したって感じです。覚えることが多くて、医学部がこんなに大変なところだとは思いませんでした。バイトしたくても、今のところ、全く時間がないんです」

医学部はハンパない勉強量と知っていたから、北原の毎日が想像できた。「そうでしょう。医学部だもの。弱音をはいちゃダメ。横山に続く糸中の秀才として、ノーベル賞を目指してちょうだい。糸中からノーベル賞受賞者が出たら、鼻高々だわ。期待してるわよ」校長は、相変わらず自分が有名になることしか考えていなかったが、結果を出す校長ということで父母からは、絶大なる信頼を得ていた。

校長は、右隣の横山に視線を移した。「横山には、迷惑かけたわね。無理だったら、断ってもよかったのに。本当に、帰国して問題なかったの」横山は、笑顔で返事した。「H大学は、研究目的がはっきりしていれば、意外と海外短期留学が可能なんです。成績さえよければ、特に、許可が早いんです。研究テーマは、「日米安保条約と日本国憲法改憲の是非について」なんですけど、T大に1か月間の短期留学許可をもらったんです。みんなにも会いたかったし、校長の招待に感謝しています」

校長は、横山の成長を感じた。「何か、すごく大人になったみたい。欧米人の彼氏でもできたのかしら。日本人は、欧米人にもてるというじゃい。まさか、教授と不倫てことはないわよね。横山は、度肝を抜くことをやるから。冗談はさておき、将来は、何になるつもり？」不倫のことを言われ、心臓が止まる思いだった。だが、平静を保ち返事した。「大学からは、国防省を勧められているんです。でも、国連で働きたいとも思っています。迷っているんですが、H大学では、優秀な学生は、3年次で就職を決めるんです。ちょっと、焦っています」

アメリカでは、政府関係の機関やトップ企業が、トップランクの大学の優秀な学生を青田刈りするのが通例になっている。特に優秀な学生は、2年次で就職先が決まってしまう。国防省、DIA、CIAは、学生にターゲットを絞ったヘッドハンターなるものを使い、特別なルートで内定させているという噂がある。優秀な日本人として、横山に、国防省が目をつけたと思われた。

校長は、できれば日本の大学に就職してほしかった。というのも、校長の手足として働かせたかったからだ。「自分の決めた道を進むのが一番。でも、日本の将来のために、日本の大学で教鞭をとるのも悪くないと思うんだけど。もし、希望する大学があれば、言ってちょうだい」校長は、参議院議員で大学の顧問もやっている父親に頼めば、どの大学にでも就職させることができた。

当初、日本の裁判官を目指していたが、H大学で学ぶようになってからは、日本の司法制度に疑問を抱くようになっていた。今では、日本の大学で教鞭をとりながら、日本の司法の改革に取り組みたいと思うようになっていた。「ありがとうございます。3年次には、決定したいと思っています。その時は、よろしく願います」校長の策略は、なんとなく感じ取っていたが、校長の政治力を利用したいとも思った。

現在婦人警官でバリバリやっている峰岸に校長は目を移した。「峰岸、去年は、全日本で準優勝だったじゃない。やるわね。峰岸の活躍で、剣道部員が毎年増えているし、成績もうなぎのぼり。峰岸様様だわ。」峰岸は5歳のころから剣道一筋でやってきた。九州では、敵なしであった。「母校のためにも頑張ります。今年こそ、優勝して見せます」

校長は、峰岸が女子の部長だった時の男子部長をしていた三島の活躍について話し始めた。「ほら、峰岸のライバルだった三島君。全日本学生で優勝したんだってよ。峰岸の彼氏でしょ。今でも、付き合ってるの？彼なら間違いないわ。男の中の男よ。今時いない、武士のような男子ね」峰岸は、時々、三島と練習をしていた。「彼氏っていうほどじゃないんですが、時々練習相手をやらせてもらっています。ここまで強くなれたのは、三島のおかげなんです」

校長は、峰岸の気持ちがよくわかっていた。「あらあら、お熱いこと。剣道でデートってことでしょ。好きはものの上手なれ、っていうけど、ほんと好きになると上達するってことかしら。とにかく、以前は、鬼校長といわれていたけど、二人のおかげで、文武両道の校長と言われるようになって、感謝してるのよ」冷やかされた峰岸は、顔を真っ赤にして顔をキョロキョロさせた。

最後に、校長がママをしている中洲の高級クラブ”まりこ”で働いている小島をみんなに紹介した。「ゆう子とリノは、小島を知ってるわね。音楽の先生をしていた小島先生。先生は事情があって、学校をやめられたんだけど、縁があって、今は、私のクラブで働いてもらってるの。クラブのトップホステスなの」小島があいさつした。「縁があって、ママと一緒に働かせてもらっています。よろしく」

8時を過ぎるとメロン、マンゴー、パイナップル、オレンジ、ショートケーキ、ソフトクリーム、アップルパイ、などのデザートが運び込まれてきた。校長は、よだれをたらさんばかりの笑顔でみんなに声をかけた。「みんな、食べ放題よ。好きなものをお腹いっぱい食べて」みんなも、キャ～～、おいしそう～～と笑顔で歓喜の黄色い声を響かせた。ゆう子が、カラオケの準備を始めた。「みんな、歌い放題だってよ。ここは、離れだから、大声を出してもいいんだって。バンバン歌いましょう。みんな、選曲して」

リノが叫んだ。「私は、恋チュン」横山が手を挙げた。「私は、波乗りかき氷」北原が立ち上がった。「マジスカロックンロール」峰岸が大声で叫んだ。「私は、マジジョテツペンブラス」校長は、小島とひそひそ話をしていた。ゆう子が、尋ねた。「校長も早く決めてください」校長は、悩んだような顔つきで首をかしげた。「私も歌うの？恥ずかしいわね～」ゆう子がはっぱをかけた。「校長の歌を聞きたいわ。みんなも聞きたいでしょ～～」みんなは、大声で叫んだ。「ききた～～い。歌って、校長」

校長は、小島とデュエットで歌うピンクレディーの懐メロをうたうことにした。「それじゃ、ペッパー警部」みんなは、一斉に拍手した。ゆう子が、マイクをとって、お辞儀をした。「それでは、まず最初に、21世紀のピンクレディー、エロエロレディーのペパー警部。どうぞ」みんなの大きな拍手と笑い声がどっと沸きあがった。歌い始めるとあっという間に時間が過ぎ去った。校長が、みんなに声をかけた。「おもいつきし歌ったことだし、お風呂に行きましょう。縁結び温泉で、みんな、イケメン彼氏をゲットするのよ。さあ、行きましょう」

縁結び温泉というのは、浴場の中心に約2メートルの男根がそびえたつ男根の湯のこと。この巨大男根を縁結びの神様にするのを発案したのは、横山だった。5年前経営不振に陥ったさしはら温泉を立て直そうと考えていた時に、横山が思いついたのが巨大男根だった。男根の湯は、国際的に縁結びの湯として有名になり、今では、海外からのお客も多かった。彼女たちは、更衣室で浴衣を脱ぐとお互いの体を見比べていた。

ゆう子のふさふさした陰毛は、黒々と盛り上がっていた。ゆう子は、横山のパイパンが目に入ると驚きを声にした。「横山、いつからパイパンにしたの？アメリカで流行っているの？」横山の彼氏は、オランダ人の妻子持ちでパイパン好みだった。彼のためやむなくパイパンにしていたが、そのことは口にできなかった。「まあ、流行ってるというか、パイパンの女子って普通」

小柄だが剣道で鍛え挙げたマッチョな峰岸のボディーにみんなの目が集中した。リノが峰岸のお腹をポンポンとたたいてワウ～～と驚きの声を発した。「スゲ～～、割れてるじゃん。やっぱ、鍛えられた体ってすごいよね。でも、ちゃんと胸は膨らんでいるし、うらやまし～～。こいつ」ペチャパイで悩んでいるリノは、飛び出している乳首をキュッと引っ張った。

北原、リノは、身だしなみとして陰毛の手入れをしていた。リノが、ゆう子のむさくるしい陰毛を指摘した。「ゆう子、手入れしなよ。それじゃ、はみ出すでしょ。みっともないわよ。こういうことには、全く、無精なんだから。それじゃ、彼氏、逃げるわよ」ゆう子は、自分の陰毛がかなり盛り上がっていることにはっとした。去年、水着を着なかったために陰毛のことをすっかり忘れていた。恥ずかしくなったゆう子は、顔を真っ赤にして弁解した。「そう、いじらないですよ。最近、忙しくて、手入れできなかったんだから」

ゆう子は、マシュマロのような真っ白なお尻をプルンプルンと振るわせながらみんなを置いて湯船にかけていった。湯船には、すでに多くの女性が男性運がよくなるようにと祈願していた。楕円形の湯船の中心にある光り輝く紫色の龟头を持つ朱色の巨大男根が、ハーレムを作るように迷える女性に囲まれていた。彼女たちは、男性運がよくなるようにとひたすら手を合わせて祈願していた。龟头の下の部分には、ご神示が金色の文字で彫り込まれていた。「この男根の神に祈願せよ、必ず願いが叶う」

ゆう子を先頭にみんなもドボンと股間をおっぴろげて無作法に湯船につかると早速、手を合わせて祈願した。リノは、ハル君が浮気しませんように。ゆう子は、ファンが増えますように。横山は、避妊に失敗しませんように。北原は、イケメンと付き合えますように。峰岸は、三島が振り向きますように。小島は、金持ちの彼氏ができますように。校長は、やす君のインポが治りますように。それぞれ、わがままな願いをした。

そのころ安田は、鳥羽の胡坐の上で寝込んでしまったマリリンにチュ〜チュ〜のにおいがかがせ、必死に起こしていた。マリリンは、いったん寝付くとなかなか起きなかった。気持ちよさそうな寝顔を見つめ鳥羽が話し始めた。「なかなか起きませんね。このままそっと運びますか？とにかく、リノさんの近くで寝てくれれば、録音はできますから」安田も起きそうにないマリリンを見て、このまま運ぶことにした。

「マリリンがさみしがっているといって、抱っこして運ぶことにしよう。いつもリノと一緒に寝ているから、うまくいくと思うんだが、もうそろそろ、騒ぎも収まったころだろう。ちょっと電話してみるか」安田は、内線電話で桔梗（ききょう）の部屋番号をプッシュした。しばらく、呼び出したが誰も出なかった。「出ませんね。風呂じゃないですか？今頃、みんな、裸になっているんですね。ゆう子姫も」

安田も風呂だと思い、リノたちが戻ってくるのを待つことにした。安田は、ぶつぶつと独り言を言い始めた。「今頃は、男根に手を合わせているころだな。まったく、女子というやつは、気楽なもんだ。でも、あの男根のおかげで、リノは、俺をゲットできたのかもな。今では、俺は、セックスの拷問にあっている。男根の神を冒瀆したあたりかもしれない。これからは、俺も、女子運がよくなるように、手を合わせるとしよう」

鳥羽はじっと安田のたわごとに関心していたが、時刻はとっくに9時を回っていた。やはり、重要な密会は、真夜中に行われるのは間違いないように思えた。「思ったより、バカ騒ぎが長引いたんですね。もうそろそろ、戻ってきてませんか。もう一度、電話してはどうですか？」うなずいた安田は、桔梗の内線番号をプッシュした。呼び出し音が3度なると受話器からリノの声が飛び出した。「はい、こちら離れの桔梗ですが」

安田は、リノの声を聴いてほっとした。「おい、俺だ。リノ、お願いがあるんだ。マリリンがさみしがっているみたいなんだ。さっきから、リノがいないもんだから、さみしそうな声で、ニャ～ニャ～鳴いてるんだ。それで、今から、マリリンをそっちに連れて行っていいか？ネコ嫌いな女子はいるか？」リノが即座に返事した。「ちょっと待ってね、みんなに聞いてみるから」リノは、みんなにマリリンがやってくることを伝えたが、だれも反対しなかった。

「みんな、歓迎してるみたい。マリリン、連れてきていいわよ。そいじゃね」安田は、ニコッと笑顔を作った。「うまくいきそうだ。ネコ嫌いはいないそうだ。今から、作戦開始だ」安田は、鳥羽の胡坐で寝ていたマリリンを受け取り、部屋を出ていった。しばらくして戻った安田は、ちらっと見た部屋の様子を話し始めた。「マリリン、歓迎されたぞ。みんな、かわいいとって、なでなでしてた。みんな、浴衣姿で、色っぽかったな～。でもな、校長、すっぴんで、別人かと思ったぞ。やっぱ、女は、化け物だぞ。鳥羽、気をつけろ」

鳥羽は、密会の内容が気にかかっていた。うまく録音できることを祈っていた。「あとは、録音がうまくいくことを願うだけです。マリリンがリノさんの脚もとで寝てくれることを祈りましょう。ワクワクしますね、先輩。早く、明日にならないですかね」確かに、安田も録音内容に関心はあったが、どんな内容であれ、自分たちには関係ないことだと予想していた。「まあ、そう、焦るな。聞いてからのお楽しみだ。校長の話だ。所詮、悪だくみに決まっている」

密談

校長は、11時を確認するとリビングで騒いでいるみんなを和室に呼び寄せた。「みんな、こっちに来て」みんなは、ついに重要な密談が始まると思い、神妙な顔で和室に向かった。リノは、リビングのソファでぐっすり寝ているマリリンを起こしてはいけないと思い、スリッパの音をさせないように忍び足で行った。全員部屋に入ると校長は、ふすまをパシッと閉じた。和室のテーブルの周りに正座したみんなは、校長の顔をじっと見つめた。校長は、目を輝かせ、話し始めた。

「今日、みんなに集まってもらったのは、ぜひ、協力してほしいことがあったからなの。なるべく、みんながわかりやすいようには、話すけど、何か質問があれば、遠慮なく言ってちょうだい。みんなも知っていると思うけど、日本の中心は、東京から福岡に移ったの。ということは、福岡で重要な会議が頻繁に行われるということ。そこで、彼らの情報をいち早く入手できれば、マフィアに先手が打てる。

そこで、私が、できる限り会議をさしはら温泉で行うように根回しする。でも、議員たちもマフィアも用心するはず。そこで、リノが、議員らしき団体のおいがすれば、すぐに、団体名と参加者名をゆう子に報告してほしい。ゆう子は、小島に即座に報告する。私が、これはくさいと判断したら、小島は、予約された部屋にボイスレコーダーを取り付けに行く。宿泊が終われば、それを小島が回収する」

校長は、早口で一気に話した。「ここまではいい。何か、質問は？」リノが手を挙げ、質問した。「議員とはっきり明記されると、議員の会議だとわかるのですが、宿泊客の氏名だけだと議員かどうかの判別がつきません。そういう場合は、どうすればいいんですか？」校長は、よい質問だと思いマジな顔つきで返事した。「議員、マフィア、企業役員連中は、一般客を装って極秘にやってくるはず。議員かどうかわからない場合、怪しいと思ったお客の指名をゆう子に知らせてちょうだい。ゆう子は、小島に知らせる。あとは、私がチェックして、小島に指示します」

校長は、話を続けた。「この仕事は、危険が伴うわ。だから、7人が、うまく業務分担して、危険を避ける必要があるの。だから、みんなの力が必要な」横山が、手を挙げて、質問した。「一か月後には、私は、アメリカに帰ります。お役に立てませんが」校長は、横山にも大切な役割があることを話し始めた。「横山にも大切な役割があります。横山には、アメリカのトップ大学の研究状況を調べてほしい。その情報を北原に送ってほしい。北原は、小島に送ってちょうだい」

横山が、言語について触れた。「英語で情報を流すんですか？それとも翻訳しますか？」校長は、即座に返事した。「可能な限り、翻訳してください。こちらでは、わからない専門用語があると思うから」横山は、うなずいた。校長は、ちょっと間をおいて話を続けた。「できれば、国防相とCIAに関する情報があれば流してください。それと、麻薬関係も。今後、麻薬の密輸が増加すると予測されているから」

さらに、校長は北原の業務について話し始めた。「北原は、中継以外に日本の大学の研究について調べてほしい。今後、日本の大学もアメリカの大学と共同して化学兵器の研究をやるはず。くれぐれも、警戒は怠らないように」ほかに、何か質問は？」校長は、峰岸に視線を向けた。「峰岸は、警察内部の情報を流してほしい。手に入れた情報をタイムリーに小島に流して。北原が手を挙げた。「校長は、これらの情報をどうなされるのですか？誰かに売られるのですか？」核心を突いた質問をされて校長は、真剣なまなざしで答えた。

「もはや、日本は、アメリカの後を追うように麻薬国家に突き進んでいます。また、人身売買の拠点になることも予想されます。麻薬はマフィアだけでなく、CIAの収入源でもあるのです。このまま日本が無防備であるなら、日本も麻薬で崩壊するでしょう。だから、我々が戦わねばならないのです。みんなが集めた情報は、ある方に流します。でも、その方の正体を明かすことはできません。私を信じて。この情報は、決して悪用はしない。命がけで手に入れた情報は、必ず日本の防衛に使います。みんな、信じて」

北原は、うなずいたが、ゆう子が手を挙げた。「校長のためなら、やってみます。でも、リノは、仕事に追われ、峰岸は、駆け出しの婦人警官です。横山、北原は、学生です。活動する時間も限られています。それでもいいのですか？」校長は、うなずいた。「みんなのできる限りの力を貸してもらえればいいの。当然、危険を伴うわけだから、それなりの報酬は、約束します。むしろ、みんなは何も知らないほうが、安全なの。ほかに、質問は？」

質問がないことを確認した校長は、締めに入った。「今回の話は、決して他言しないこと。すべての連絡は、今、言ったルートを使うこと。直接私に連絡してこないこと。小島が情報を集約し、私が小島に指示を出します。そうすれば、私たちの存在は、表面化しません。日本のために、一致団結して頑張りましょう」話を締めくくった校長は、ふすまを開いて話をオープンにした。リビングのソファでは、花提灯を膨らませたマリリンが笑顔でぐっすり寝ていた。